

大学院で学ぼう③

—大学院を修了し、学校管理職として活躍している修了生の方より—

今回は、兵庫教育大学の教職大学院（生徒指導実践開発コース）を修了し、教育事務所での勤務を経て、教頭先生として働いている方に寄稿していただきました。以下、いただいた原稿をそのまま掲載します。

（兵庫教育大学 古川雅文）

私が大学院で学びたいと考えたのは、当時の校長から「これからは教員組織の中心となり、ミドルリーダーとして力を発揮してほしい」と言われたことがきっかけです。たいへん励みになる言葉をいただきましたが、正直、自分にそんな力量があるのか不安でした。これまで生徒に愛情を持ってねばり強く関わり、学級経営や授業、部活動に情熱を傾けてきました。そのような自分の経験には自信がありましたが、「自分が経験で得たことはどのような意味を持つのだろうか？」と自問自答したときに明確な答えが自分の中では出せませんでした。「これではいかん！」と思いました。自分の経験に意味を見出し、ミドルリーダーとして自分に必要なこと学んで力量を高めなければならないと考えるに至りました。

そして平成25年4月から平成27年3月までの2年間、兵庫教育大学の教職大学院（生徒指導実践開発コース）で学びました。本稿では教職大学院で学ぶことの意義や現在の職務に大学院での学びがどのように生きているかなど、私なりに振り返ってみたいと思います。

大学院では2つの大きな「出会い」がありました。「人との出会い」と「理論との出会い」です。教職大学院では他の都道府県の現職教員やこれから教員になるストレート院生など、様々な経験を持った方々と教育について語り合いました。共有できる課題もあれば、そうでないこともあります。それぞれに経験が異なり、現職教員であれば指導理念や指導方法も個性的です。今思えば、このような仲間と議論すること自体が学びであったと思います。さらに、授業で生徒指導、教育相談、道徳教育、キャリア教育、特別活動・地域連携など幅広い分野を学び、そこで学んだ理論や知見が仲間との議論に加味されていきます。自分の教職経験を大学院の学びの中で検証するというようなことが起こるので

す。日を重ねるごとに議論は深まり、新たな課題が目の前に表れます。それをまた仲間で議論する。この繰り返しなのですが、現職教員が大学院で学ぶ意義はここにあると思います。

さて、大学院を修了すると勤務したのは学校ではなく、教育事務所でした。大学院での学びを学校で具現化することに大きな楽しみと期待を持っていただけに、かなりショックも大きいものがありました。キャリア教育の授業で学んだ「計画された偶発性理論」を思い出し、チャンスだと思って気合を入れ直しました（笑）。教育事務所に2年間勤務し、生徒指導を主に担当しました。指導主事として大切にしたのは各校の強みや弱みをしっかりと把握し、学校（先生方）と課題を共有したうえで、多面的・多角的に支援することです。アンケート結果や各種調査の結果など統計的な資料から見えてくるもの、学校訪問で自分の目で見て見えてくるもの、先生方との対話から見えてくるもの、現実には起こっている出来事などを自分なりに分析します。ここでは大学院での実践研究の経験が活かされました。多様な資料を用いた分析には説得力があります。先生方も納得感を持って課題解決を図ろうとします。生徒指導では「これが正解！」というものを提示することは難しいのですが、大学院で学んだ理論や知見をもとにして、より有効であろうと思われる手立てを提示したり、指導のポイントについて助言をしたりすることはできました。また、学校（先生方）との関わり方について、課題解決の主体はあくまで学校（先生方）ですので、学校（先生方）の自律性を尊重した指導・助言となるよう心がけました。2年間という短い期間でしたが、指導主事として学校（先生方）と関わったことは貴重な経験となりました。現在は教頭として学校に勤務し、2年目を迎えています。教頭職は偶発的ではなく、確固たる自分の意志であることをお伝えして、本稿を閉じたいと思います。

（島根県隠岐の島町立西郷中学校 教頭 濱田耕一）